

テーマ： 私の抱負
サブタイトル：人のために生きる

出身：韓国
発表者：鄭 企娟

私は病気になって、人に助けられ、人の大切さ、そして生きることの大切さを感じました。今、私の抱負と言えるのは 人のために生きる ことです。

私は日本に留学して本当によかったと思います。日本という国は、お金、名誉、地位を追っていた私に本当の夢を教えてくれた国だったからです。

2001年4月に日本へ来て、今年で6年の月日が経ちました。ふりかえてみればあつと言う間な時間ですが、じっくり考えてみると、色んな経験をし、色んな人と出会い、色んな人生を味わうことが出来たと思います。

日本が大好き！！日本に来て本当によかったな！！ と思うばかりです。

修士論文が終わりを迎えた夏、私は日本を訪問していた韓国人の通訳を担当することになりました。しかし、通訳の途中、急に倒れたのです。病院に運ばれ、色んな検査を受けた結果、前白血病(骨髄異型性症候群)という病名でした。骨髄移植を受けなければ4年しか生きられないという診断結果を告げられたのです。最初は涙も出ませんでした。信じられなかったのです。

人の前では泣きたくない！弱い自分を見せたくない！ と固く信じていた私は、その時もとっこり笑っていたと思います。

悪いことはしていないのになんで私にこんなことが... と神様を恨んだりもしました。家に帰っては夜中まで泣き続けました。4年という時は当時27歳だった私にとっては凄く短い時間だったからです。しかし、その時、心の支えになってくれた人々がいます。米山奨学生の時、出会ったロータリーアンの方々和日本にいる友たちです。病院の手当から始め、私の痛みを分ち合ってくれたり勇気の言葉をかけてくれたりして、落ち込んでいた私を救ってくれたのです。その時考えたのは、事故で急に死んだ人、または、余命三ヶ月だと告げられた人達に比べたら、私の4年という余命は決して短い時間ではない！彼らのためにも落ち込んではいられない 頑張らなきゃ と思いました。

そして残りの修士論文を終え、博士課程まで行くことを決めたのです。もちろん、病気を治すべきだという周りの反対もあったのですが、自分自身に負けたくなかったのです。

今すぐ骨髄移植を受けるわけではないので、勉強を続けることが出来ました。

発病から6ヶ月が経ち、韓国の病院でもう一度骨髄検査を受けることになりました。検査の結果、前白血病ではなく再生不良性貧血という病名に変わっていたのです。この病気

は骨髄が血を作れないので輸血を受けながら生活をしなければいけません。

最終的には骨髄移植を必要としますが、異変が起きない限りは前よりはもっと生きられるという希望がありました。

薬で治療を受けながら勉強を続けました。強い薬のせいか、体がだんだん弱まっていく自分を感じました。ひどい頭痛や熱、息切れがますますひどくなったり、血が止まらなくなったりして、病院に運ばれる日々を送っていたのです。正直、凄く怖かったです。そんな体でも何とか頑張って博士の単位を全部取ることが出来ました。

しかし、その時自分に言い聞かせたのです。私はいったい何のために生きているの？何のために勉強をしているの？お金のため？地位、名誉のため？死んだらお金も地位も終わりなのに... こんな人生に意味があるのか。

虚無の風がすーっと吹いてきました。

そして神様に祈りました。

神様、まだ私を連れていかないでください。一粒の麦になるように頑張ります。

どうか、私を救ってください。

死ぬ ということ常を常に考えて生きていく人は少ないでしょう。

しかし、私は死ぬということだけを考えて生きていく人をたくさん見てきました。彼らは私が入院していた時、白血病などの血液癌と戦いながら骨髄移植を待っている人達でした。抗がん剤で頭は坊主になって、顔は真っ白で、抜け殻みたいな体をして。“明日はまた誰が死ぬだろう”切ない毎日でした。そういう中、私は決心しました。

必ず健康になって人のために生きたい。人のために生きようと。

最初来日した時の夢は、一所懸命勉強をして、仕事をして、お金をもうけて、流行の服を着て、素敵な家に住み、海外旅行をし、おいしいものを食べて、人生を思いっきり楽しんでいくことでした。

しかし、今は違います。私のためでなく人のために生きることです。私が人のために出来ることは、貧しい国の子供達に教育と夢と幸福を与えることではないかと思えます。大きい力にはなれないかも知れませんが、暖かい気持ちで彼らを支えることを希望として生きたいと思えます。

人というものは一人で生きていけない。お互いに助け合い、心を分かち合うことで人は存在する と叫びたいのです。

皆さん！この世界のために、人のために何か出来ることを求めていくのはいかがでしょうか。

最後に私が大好きな詩の一部分を読んでこの発表を終わらせたいと思えます。

この詩は、映画ローマの休日で一躍スターになったオードリー・ヘップバーンが、死ぬ1年前に、自分の息子に聞かせた詩です。私なりに和訳を試みましたのでどうぞ聞いてください。

魅力的な唇がほしいのなら、
優しい言葉を口にしなさい。

かわいらしい目がほしいのなら、
人々の良いところを見なさい。

美しい体付きがほしいのなら、
あなたの食べ物を貧しい人々に分け合いなさい。

素敵な髪がほしいのなら、
一日一回、子供の手で触れさせるようにしなさい。

綺麗な姿勢がほしいのなら、
決して、あなたが一人で歩いていないことを覚えなさい。

ご清聴ありがとうございました。